

2026

HARVARD-YENCHING

INSTITUTE WORKING

PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of chapters for an autoethnographic fiction provisionally titled *Futsuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual): Alice's Adventures in Multilingual Japan*, scheduled for publication in 2027; from June 2024 to February 2027, approximately twenty chapters, including a prologue and an epilogue, are being prepared in Japanese. Based on the author's personal experiences, the work follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese, and portrays her everyday use of multiple languages. Japan is often misunderstood as a "monolingual society," but this work demonstrates that it is, in fact, a "multilingual society," critically reexamining the notions of ordinariness and equality in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored through narratives of homeland loss and regeneration; at the same time, the work encourages critical reflection on our unawareness of the privileges of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies structuring our lives, aiming to evoke readers' own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, the project seeks to explore the possibilities of creating a socially just world, and, in preparation for a future English edition—and to explore the possibilities and limits of translation—English versions of all chapters will also be included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Ordinariness and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約: 本作は、2027年度に出版予定の自伝的民族誌的フィクション『ふつうのマルチリンガル——多言語社会日本におけるアリスの冒険』（仮題）の各章の初稿であり、2024年6月から2027年2月にかけて、プロローグとエピローグを含む約20章が日本語で執筆される予定である。著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が日常的に多言語を使う姿を描き、日本がしばしば「モノリンガル社会」と誤解される一方で、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」の概念を言語使用の観点から批判的に問い直す。多様性・共生・植民地主義や戦時加害性・言葉の力といったテーマを故郷喪失と再生の物語を通じて描き出すとともに、「日本語」や「英語」の特権性や生活を形づくる言語的ヒエラルキーへの無自覚さについて批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を呼び覚ますことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的に公正な世界を構想する可能性を探る試みであり、将来の英語版出版に備えると同時に翻訳の可能性と限界を探るために、全章に英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつう／平等主義、植民地主義・戦時加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

11 ボホール Bohol ただよう祝福

森をぬけて、記憶の光へ

森の緑と海の青のあわいで、名もなき祝福がわたしたちを訪れる、そのとき

二十世紀の最後の年、いわゆる「世紀末ウィーン」で活躍した画家のグスタフ・クリムト (Gustav Klimt, 一八六二年～一九一八年) の『接吻』が好きだというティンに連れられて、フィリピン中部、セブ本島とレイテ島のあいだにあるボホール島 (Bohol Island) に休暇にやってきた。フィリピンでは、古代のサンゴ礁や貝殻などが長い時間をかけて堆積してできた石灰岩は各地に見られるけれども、その多くは山の一部や海辺の一角など、限られた範囲に点在している。ところがこの島では、石灰岩が島の地質を広く覆い、さらにそれが雨水や地下水に溶かされてできたカルスト地形がまとまって生まれ、フィリピンでもユニークな風景をつくっている。わたしたちは恋人として、ティンの両親の出身地であるここを訪れている。

州都タグビララン (Tagbilaran) の老舗ホテルから車に乗り、海沿いの道を少し東に走って左に折れ、島の中央をつらぬく幹線道路に沿って内陸に向かう。くねくねした山道をのぼると、やがて緑の天蓋に包まれるような森林地帯、Bilar Man-Made Forest にさしかかる。車を降り、大地を踏みしめて両腕を真横に開くと、木々の呼吸にわたしたちの呼吸が呼応するように、からだの境界が緩んでいく。地面にはごつごつした太い根が、木彫りのように浮き上がり、こちらに向かって這ってくる。「マホガニーは外から来た木だけど、いまは根づいてしまった。壊しながら、生かしながら」とティンが言う。わたしは地面に支えられて立ちながら、根が土の奥へと伸び、見えないところでさまざまな生きものと土壌をつくっていることを想う。

森をぬけてまもなく、ティンの父の故郷、ビラール (Bilar) に着く。かつてダゴホイの反乱¹を経て、帰順した人びとが再定住した場所のひとつだという。町の中心には、農民の守護聖人サン・イシドロを祀る教会 (Parish Church of San Isidro Labrador) があり、その向かいの住宅地の一角に、年老いた親族が暮らす家がある。通された部屋には、寝台に横たわる男性が静かに目を閉じている。やがてその手が動き、小さな卵

¹ ダゴホイの反乱 (一七四四年～一八二九年) は、スペイン植民地支配に対する抵抗運動で、ボホール島山岳部を拠点に八十五年間にわたり続いた。指導者はフランシスコ・ダゴホイ。

をひとつ、わたしに手渡してくれた。あたたかい。家の裏手からマンゴーの木々を抜けて、祖先の眠る墓所へ向かう。白い石棺は二連のひつぎを合わせたようなかたちで、蓋には青と緑の細かいガラス片が帯のように埋めこまれている。陽光を反射してきらめくその色に、ふと、光のなかへ吸いこまれていくような感覚をおぼえる。

ピラールを出て、もと来た道をたどり、タグピラランに向かう。ティンの運転する車の助手席で、わたしはいつのまにか目を閉じている。途中、バクラヨン (Baclayon) で車が停まる。ダバオにいる母親に、修道院の裏にあるベーカリーで卵黄菓子ブラス (Broas, Ladyfingers) を買うという。わたしはひとりで、教会 (Parish Church of La Purísima Concepción de la Virgen María) の入り口へ向かう。海辺からの風に薔薇色のドレスのすそがふくらむ。サンゴ石で造られた古い聖堂。青いタイルを踏み、色ガラスからの光に照らされて奥へ進む。中央の祭壇衝立²には金の蔓と実が絡むバロック装飾。下段中央に、青いマントと光背をまとい地球に立つ聖母マリア。足元の蛇はねじれ、牙も毒も抜かれたように沈黙している。揺るぎないまなざし。息が少し苦しい。

流れゆく水、ひびく祈り

「アリス、目を覚まして」シダは、わたしがひとりになると現れる。「ゆっくり立ち上がって、息をほそく、しっかり吐ききってみて」。ドレスを直し、おなかに両手を重ねて顔をあげると、赤みがかった茶色の太い柱 (haligi) が通路をはさんで二列に行進している。その動きに足元がふらつき、倒れないよう歩幅をすこし広げ、足裏で床をとらえる。大地から湧き上がるような波に、からだをゆだねてみる。大丈夫、倒れない。灰がかかった青と白のタイルが、ダイヤ模様のように床一面に敷きつめられている。そのリズムに導かれるようにして、ダークチョコレートのように濃い中央祭壇衝立にたどりつく。手前の祭壇も説教台も、左右の祭壇衝立も、みな同じく深く光を吸い込む色をしている。これは地元原産の、とても堅くて重たい木、モラーベ (Molave)。

ここは、アルブルケルケ (Albuquerque) の教会 (Parish Church of Santa Monica) 。レタブロの彫刻を見つめていると、その記憶が夢のように立ちのぼってくる。いつか大きな地震が来る、その前に、村人たちは力を合わせて聖堂を修復する。地元の森で切り出された木が、手から手へと運ばれ、職人たちの手で丁寧に削られ、組まれ、彫られていく。その工程のひとつひとつが精緻で、聖地で祈らずにはいられない。蔓や花、聖人たちのまなざしに宿る手仕事には、長い年月の祈りとともに受け継がれてきた時間が刻まれている。見上げれば、セブ (Cebu) に拠点をもっていたレイ・フランシア (Ray Francia) が描いた天井画が、空間を包むように広がっている。色ガラスを透る光がやわらかく空気を染め、木々とともに、ゆるやかな旋律を奏でている。

わたしはもと来た道を、ひとりでもどる。川の水と海水がまじる黒っぽい水に、ニッパ椰子 (nipa palm) が天使の緑のつばさのように群れをなすロアイ (Loay) の河口を

² 改稿メモ：黄色をかけた部分につき、表記にかんする迷い。

左にまがり、川にそってただよう。着ている薔薇色のドレスは、ティンが贈ってくれたものなのだけれど、わたしはひとり。より正確に言えば、シダにともなわれてはいけるけれど、シダはわたし以外には見えない。「アリス、しっかりしなさい」——小さいころ夢のなかでしていたように、わたしはわたしを励ます。やがて川の向こうに、赤い屋根の石造りの教会が見えてくる。ロボック (Loboc) の聖堂 (Parish Church of San Pedro Apostol)。正面はしまっていて、横の小さな扉からそっと入る。会衆席の中央通路に、青い布を添わせて歩く人たちがいる。結婚式の支度だろうか。

ここのママ・メリー (Mama Mary) は、どこから来たの？ メキシコのグアダルupesの聖母と同じ名前 (Nuestra Señora de Guadalupe) だし肌も黒いけれど、青ではなく赤いマントをまとい、両手を胸の前で合わせず、片腕に幼きイエズスを抱いてうつむくこともなく立っている。スペインのエストゥラマドーラ州のグアダルupesに起源する聖母信仰から、むしろ直接来ている感じがする」とシダがささやく。シダは見たの？ さあ、わたしたちはとにかく長生きしているからね。あなたは、キリスト教よりも先に生まれたの？ さあ、聖書はどうかわからないけれど、まあ、いいから、天井を見上げてごらん。一八七六年十一月二十六日、聖母が川の洪水を止めたことを記念した小ぶりの絵が描かれている。薄い水色のマント、氾濫、そして悲しみ。

祈りと崩れのあわいで

とても眠い。ふわふわとロアイまで戻り、右に折れて海岸沿いを北へ向かう。マリボホック (Maribojoc) の町に着いたとき、坂道の途中から見える海が、かすかに揺れていた。教会 (Santa Cruz Parish Church) には正面の扉から入り、奥にある中央の祭壇衝立に向かい合う。白地に金色で蔦や花がまっすぐに伸び、やがて天使たちの舞うアーチへとつながっていく。ところどころ赤褐色の木肌がのぞいている。ここの守護聖人は「サンタ・クルス」、つまり聖なる十字架そのもの。祭壇の奥に見える十字架は小さく、金色に輝いている。よく見ると、その手前にもうひとつ、燻されたような金色の、より小さな十字架が立っている。わたしは十字架のしるしを自らの身体になぞるたび、いったい何を求めているのだろうか。薄い水色の天井画に手をのばしてみる。

海へと向かう道をたどっていく。やがて、赤茶けた囲いと十字架が見えてくる。十八世紀に建てられた三角形の石の見張り塔 (Punta Cruz Watchtower) は、いまも岬の先に立ち、遠くにセブ島を望んでいる。「いまから十三年後、地震で地面が隆起して海が遠のき、波が打ち寄せている砦の下には草が生い茂るようになる」とシダが言う。十字架は海に向かって両腕を広げている。「In the name of the Father, the Son, and the Holy Spirit, Amen」と声に出してみる。Mag-ampo **kita** (祈りましょう)。そう司祭が始めるミサの言葉は、司祭と、そこに共にいる「わたし(たち)」を含む **inclusive we**。でも、わたし自身は、ほんとうにこの「わたしたち」に含まれているのだろうか。わたしの身体は十字架をすりぬけ、打ち寄せる波に、しずかに、泡のように溶けていく。

午後の光に包まれてぼかりと浮かび上がり、わたしはロオン (Loon) の丘に続く百七十四段の石段をのぼっていく。石に触れる足もとは確かなのに、天から持ち上げられているように身体が軽い。空のなかに、教会 (Nuestra Señora de la Luz Parish Church) がぼかりと浮かぶように立っている。中へ入ると、ひらけた空間が静かに迎え入れてくる。深く穏やかな呼吸。高い天井と石の柱が、やわらかい光を受けとめている。足元には模様入りのタイルが整然と敷きつめられ、音楽を奏でながら奥へ続いている。祭壇には、黄金の衣をまとった光の聖母が御子を抱き、伏し目がちに、深緑の布に包まれた台座の上に立っている。マントの青さよりも、背後に燃えるような真紅が強く迫ってくる。声にならない祈りのことばをひとつ唱える——Mag-ampo kita.

気がつくと、みぎわに佇んでいる。記憶がよみがえる。わたしはセブ島から渡ってきた。「夫の住む場所に行きたいから、舟に乗せて」と漁師たちに頼んだけど、ずっと断られつづけた。わたしが壊れそうで、ボホール島に着く前に死んでしまうのではないかと、心配されたのだった。最後に頼んだ漁師たちが、ようやく舟に乗せてくれた。やがてダウイス (Dauis) の岸についた漁師たちは、商いにいそがしく、わたしが舟に残っていることをすっかり忘れてしまった。そのことに気づいたとき、漁師たちは悪かったと思った。わたしを忘れてしまったことを、手助けしなかったことを。そして積み荷のところにもどると、わたしは像になっていた。「ママ・メリーじゃないか」——漁師たちは、わたしを聖ヨセフと御子の像のところに連れていってくれた。

ほんとうのさいわい、あるいは通りすぎるものたちへ³

白砂の上で ひと
ことばを持たぬものと 横たわる
潮の音に まだ名のない願いを ゆだねて

むかし ワニが道をわたり
だれかの小舟を呑みこんだ
その川も いまは 光を運ぶ

moagi—— 通りすぎるものたち
焼かれた町 きいたことのないことば
やがて、雨が土をほどく

夜の椰子がゆれるたび

³ 改稿メモ：この詩は「視点人物」を定められなかった。「わたし」はアリスであり、同時に「胎児」でもあり、地元のだれかでもあり、植物や動物や風景でもありうる。個人の歴史であり、地域の歴史であり、もっと普遍的な何かの歴史のようなもの。基本的には、宮沢賢治の『銀河鉄道之夜』へのオマージュ。オマージュであることを表記するかは迷っている。この章全体が小林康夫先生の『青の美術史』へのオマージュでもある。

だれかのうたが 風になる
忘れられたもののなかに、記憶がやどる

わたしは まだ知らない
からだのおくに 灯りがともることを
この星のまたたきが それを知っている

柔らかに抱かれながら 耳をすませる
生まれては消える 波のこえに
それが痛みか よろこびか わからぬまま

うまれなおす、ということ
瓦礫となった 教会を立てなおすように
その手のなかで 祈りは生きている

通りすぎるものたち
破壊する者も、育て直す者も、
おなじ夜の星を仰いで 旅をつづける

わたしは 無垢ではない
わたしも 罪なきものではない
帝国 複数形の 共犯につらなる者

星の夜、遠い列車の気配にまぎれて、
カムパネラの寝息に 耳をすませば
天の川が シンフォニーを響かせる

ほんとうのさいわい ほんとうのさいわい
薔薇色のドレスは 血にまみれていないか
水におぼれる子どもを 地下水が抱きしめる

ふりそそぐ^{こんじき}金色の星
そのおくに青く どこまでも暗い 暗い
静寂の嵐のなかに、十字架

湧き水のほとりで、名を呼ぶ

Unya, もう一回言わせてね、あなたに。
Okay, isulti nako kana pag-usab, mi amor.

森の緑と海の青のあわいで、名もなき祝福がわたしたちを訪れる、そのとき

Sa taliwala sa kabakahan sa lasang ug sa kabughaw sa dagat, moabut ang panalangin nga wala pa'y ngalan kanato—karong higayona.

谷へとくだる、苔むした細い石段を降りながら、足もとから立ちのぼるひんやりとした気配を感じる。木々の葉が、光をふるいながら揺れている。あいだから漏れる水音が、遠くで息づくように響いている。気づけば、わたしはカムガオの滝（Camugao Falls）の前に立っている。高く切り立った岩壁を、水がまっすぐに落ちていく。砕け、泡立ち、また流れていく。濡れた岩肌にそっと手を添えると、冷たさのなかに小さな震えが伝わってくる。滝の音と、谷を満たす沈黙とが、互いを抱きしめあう。風がひとすじ吹きぬけ、水しぶきが顔にふれる。やがて生まれてくる誰かのための、静かな洗礼。ただ流れ、ただ響き、ただここにある水。その静けさに、わたしはわくわくわくわく足がふるえる。

バリリハン（Balilihan）の丘の上に立つ教会（Parish Church of Nuestra Señora del Carmen）へ、ゆっくりとのぼっていく。白く塗られた壁が、陽の光のなかでふわりとほどけそうに見える。「ここは、ダゴホイ蜂起ののちに山から戻った人びとを迎え入れるために拓かれた教区、ビラールと通ずる」とシダが言う。ふと見上げると、古い鐘楼が木々にすっかり包まれている。かつてはアバタン川（Abatan River）を見晴らし、山のあいだに暮らす人びとにミサの時刻を知らせていたという。いまは誰も登れず、鐘の音も聞こえない。「つぎのミサの時刻を、どうか教えてください」——そう、風に向かって、現地のことばでそっと願う。からだのなかに、ひとつの音がひびく。土からのぼり、天から降りてくる、まだ名前のない、にぎやかな祈り。

教会の扉に彫られた花模様にそっと手をふれ、押す。内側の空気がやわらかくゆれ、幾何学模様のタイルが足元にひろがる。入口の聖水に指を浸し、胸の前で十字を切る。冷たさが静かにしみわたり、光を透かすステンドグラスが壁を染めている。見上げれば、天井に描かれた天国の風景が、静かなまなざしでこちらをとらえる。柱のあいだから射す光が、呼吸のようにわたしを包む。とても明るく、とても青く、とても深い。そのなかで——涙が、こぼれそうになる。わたしのなかが波打っている。思いがけず、言葉を失い、ただ立ちつくす。月曜日生まれのわたし。守護天使はガブリエル。Annunciation——天使とともに両手を胸の前で交差させ、ひざまずく聖母が浮かぶ。扉をふりかえると、アーチの向こうに、真夏の空に、森に、海に、雪がふっている。

雪の結晶のほうへ昇ろうとすると、いつのまにか結晶は花びらになり、ひらひらとまわりを舞いながら降りてくる。足元の土から、ふんわりとしたひまわりが生えてくる。かがんで挨拶しようとする。英語でも日本語でもセブアノ語でもスペイン語でもなく、ひまわりの言葉でもない、それでいて、何か大切なものを伝えられる気がする。言葉ではないかもしれない。ヤングココナッツを割ったときにあふれる、みずみずしい世界そのもののような何かを、手渡そうとした。そのとき、額に冷たい水滴を感じて、そっと目をひらく。「だいぶん、長く眠っていたね」ペットボトルの水を持ったティ

ンが、明るい声で言う。タグビラランの老舗ホテルのロビーで、ソファから身を起こす。金色の包みのキスチョコが食べたい、いますぐ、とねだる(mangayo)。

その翌年の緑が燃える五月のある日、わたしたちの娘、アテナが生まれた。

Autoethnographic Fiction: Alice’s Adventures in Multilingual Japan⁴

Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo
Waka Aoyama

Chapter 11 Bohol — Drifting Blessings

Note on languages, spellings, and narrative voice: This chapter is set on Bohol Island in the central Philippines, where Cebuano is widely spoken. Cebuano expressions are retained in their original form, with English translations provided where necessary. Spanish and Catholic devotional terms are likewise preserved when they carry cultural, historical, or spiritual significance. Place names and proper nouns generally follow widely used English forms, while local usages are maintained where relevant. Sida is referred to with the singular “they” throughout the translation.

As throughout this series, Alice’s narrative moves across languages, memories, dreams, and lived experience. The text does not always distinguish clearly between external events, remembered conversations, and interior visions. At times, the narrative voice may also shift or expand beyond a single, fixed perspective. Such ambiguity is intentional and reflects the multilingual, layered, and relational worlds through which the narrator travels.

Through the Forest, Toward the Light of Memory

At the meeting place of the forest’s green and the sea’s blue, there are moments when a nameless blessing comes to visit us.

Drawn by Ting, who loves *The Kiss* by Gustav Klimt (1862–1918), the painter associated with fin-de-siècle Vienna, I came to Bohol Island for a holiday. Located between Cebu and Leyte in the central Philippines, the island is known for a landscape unlike any other in the Philippines. Limestone, formed over long periods through the accumulation of ancient coral reefs and shells, can be found throughout the country, but usually only in scattered formations along mountainsides or coastlines. Here, however, limestone underlies much of the island itself, and over time rainwater and groundwater have carved it into an extensive karst landscape. Together they have created a scenery unique in the archipelago. We are here as lovers, visiting the homeland of Ting’s parents.

Leaving a long-established hotel in Tagbilaran, the provincial capital, we drive east along the coast before turning inland onto the highway that cuts through the center of the island. Climbing a winding mountain road, we eventually enter the Bilar Man-Made Forest, where a green canopy seems to close above us. We step out of the car. Pressing my feet into the earth, I stretch both arms out to my sides. As if our breathing were responding to the breathing of the trees, the boundaries of my body begin to soften. Thick roots rise from the ground like carvings and crawl toward us. “Mahogany came from elsewhere,

⁴ In this essay, italicization of non-English expressions is used solely for readability and does not imply any hierarchy among languages.

but now it has taken root. Destroying while sustaining, sustaining while destroying,” Ting says. Standing there, supported by the earth, I imagine roots reaching deep into the soil, creating worlds and living beings beyond sight.

Soon after leaving the forest, we arrive in Bilar, Ting’s father’s hometown. It is said to be one of the places where people resettled after surrendering in the aftermath of the Dagohoy Rebellion⁵. At the center of the town stands the Parish Church of San Isidro Labrador, patron saint of farmers. Across from it, in a quiet residential corner, lives an elderly relative. In the room where I am received, a man lies on a bed with his eyes gently closed. After a while, his hand begins to move. He places a small egg in my hand. Warm. Passing through mango trees behind the house, we walk toward the burial place of the ancestors. The white stone tomb resembles two coffins joined together. Across its lid runs a band of tiny blue and green fragments of glass. They catch the sunlight and shimmer. Looking at them, I suddenly feel as though I am being drawn into the light.

Leaving Bilar behind, we retrace our route toward Tagbilaran. Sitting in the passenger seat while Ting drives, I close my eyes without realizing it. Along the way, the car stops in Baclayon. He wants to buy *broas* (ladyfingers) from a bakery behind the convent for his mother in Davao. Alone, I walk toward the entrance of the Parish Church of La Purísima Concepción de la Virgen María. The wind from the sea lifts the hem of my rose-colored dress. An old church built of coral stone. I step across blue tiles and move inward, illuminated by colored light. On the *retablo mayor*, golden vines and fruit intertwine in elaborate Baroque ornamentation. At the center of the lower tier stands the Virgin Mary, clothed in a blue mantle and haloed with light, standing upon the globe. Beneath her feet, the serpent twists in silence, as though both its fangs and its venom have been taken away. An unwavering gaze. Breath catches.

Flowing Waters, Echoing Prayers

“Alice, wake up.” Sida appears whenever I am alone. “Stand up slowly. Let your breath grow thin. Breathe all the way out.” Straightening my dress, I place both hands over my stomach and raise my face. Thick reddish-brown pillars (*haligi*) march in two rows along either side of the aisle. Their movement makes my feet unsteady. Widening my stance a little so as not to fall, I catch the floor beneath the soles of my feet. I let my body yield to a wave rising from the earth. It is all right. I will not fall. Gray-blue and white tiles spread across the floor in a pattern of diamonds. Guided by their rhythm, I arrive before the central retablo, dark as chocolate. The altar before it, the pulpit, the side retablos—all are the same color, a color that absorbs light into its depths. This is *molave*, a native wood, hard and heavy.

This is the Parish Church of Santa Monica in Albuquerque. As I gaze at the carvings of the retablo, their memory rises before me like a dream. One day a great earthquake will come. Before that day arrives, the people of the village work together to restore the church. Timber cut from local forests passes from hand to hand. Craftsmen shape it, join it, carve it. Each step is intricate, so intricate that one cannot help but pray in a sacred place. In the vines, the flowers, and the faces

⁵ The Dagohoy Rebellion (1744–1829) was a long-running resistance movement against Spanish colonial rule. Led by Francisco Dagohoy, it endured for eighty-five years in the mountainous interior of Bohol Island.

of the saints, time itself has been inscribed—time carried forward through long years of prayer. Looking up, I see ceiling paintings by Ray Francia of Cebu spreading across the space as though embracing it. Light filtering through stained glass softly colors the air and, together with the wood, plays a gentle melody.

I make my way back alone. At the mouth of the Loay River, where river water and seawater mingle in dark currents and nipa palms gather like green angel wings, I turn left and drift along the river. The rose-colored dress I am wearing was a gift from Ting, yet I am alone. More precisely, Sida is with me, though no one else can see them. “Alice, pull yourself together.” As I did in dreams when I was little, I encourage myself. Before long, a stone church with a red roof appears across the river. The Parish Church of San Pedro Apostol in Loboc. The front entrance is closed, and I slip quietly through a small side door. Along the central aisle, people walk carrying lengths of blue cloth. Perhaps they are preparing for a wedding.

“Where did the Mama Mary here come from?” She bears the same name as Our Lady of Guadalupe in Mexico (*Nuestra Señora de Guadalupe*), and her skin is dark, yet she wears a red mantle rather than a blue one. She does not stand with her hands joined before her chest. She does not bow her head while holding the child Jesus in one arm. “She feels as though she comes more directly from the Marian devotion that originated in Guadalupe, Extremadura, in Spain,” Sida whispers. Have you seen her? Well, we have lived a very long time. Were you born before Christianity? Well, I do not know what the Bible would say about that, but never mind—look up at the ceiling. There is a small painting commemorating the day the Virgin stopped the flooding of the river, on November 26, 1876. A pale blue mantle. Floodwaters. And sorrow.

Between Prayer and Ruin

So sleepy. Floating back toward Loay, I turn right and follow the coast northward. By the time I arrive in the town of Maribojoc, the sea visible from halfway up the slope seems to tremble ever so slightly. Entering the Santa Cruz Parish Church through the front doors, I find myself facing the central retablo at the far end of the sanctuary. Golden vines and flowers stretch upward across a white background, leading at last to an arch where angels dance. Here and there, reddish-brown wood shows through. The patron saint here is Santa Cruz—the Holy Cross itself. The cross visible behind the altar is small and shines in gold. Looking more closely, I notice another cross before it, smaller still, a muted gold as though darkened by smoke. Whenever I trace the sign of the cross upon my body, I wonder what it is I am seeking. Reaching toward the pale blue ceiling paintings, I stretch out my hand.

I follow the road that leads toward the sea. Before long, a reddish-brown enclosure and a cross come into view. Built in the eighteenth century, the triangular stone watchtower of Punta Cruz still stands at the tip of the headland, looking out toward Cebu Island in the distance. “Thirteen years from now, the earthquake will raise the land and the sea will retreat. Grass will grow beneath the fortress where the waves are breaking now,” Sida says. The cross stretches out both arms toward the sea. “In the name of the Father, and of the Son, and of the Holy Spirit. Amen.” I speak the words aloud. *Mag-ampo kita*. Let us pray. These are the words with which the priest begins the Mass, words that include both the priest and the “I (we)” gathered there—an inclusive *we*. Yet am I truly included in this *we*? My body slips through the cross and quietly dissolves into the waves breaking against the shore, like foam.

Wrapped in the afternoon light, it seems to float before me. At the top of a flight of 174 stone steps stands the Parish Church of Our Lady of Light in Loon. The church was rebuilt after the earthquake, and traces of that work remain everywhere. Looking up at the façade, I slowly climb

the steps. White walls. Blue sky. Light gathers quietly between them. Entering through the doorway, I find myself standing beneath a ceiling washed in pale colors. The air is still. Prayer lingers here like a faint fragrance. *Mag-ampo kita*. Let us pray. The words return once more. This time, they do not feel like a question. They drift through the church, through the afternoon light, through the bodies gathered there. I listen to them as though listening to distant waves.

Before I know it, I am standing at the water's edge. A memory returns. I had come across from Cebu Island. "Please take me with you. I want to go where my husband lives," I asked the fishermen, but they refused again and again. They worried that I was too fragile, that I might die before reaching Bohol. At last, a group of fishermen agreed to take me aboard. When they reached the shore at Dauis, they became busy with their trade and completely forgot that I was still there in the boat. When they realized what they had done, they felt ashamed. They had forgotten me. They had failed to help me. Returning to where they had left their cargo, they found that I had become a statue. "Why, it is Mama Mary." The fishermen carried me to the place where the statues of Saint Joseph and the Child Jesus stood.

True Happiness, or For Those Who Pass Through

Upon the white sand, one
lies beside those without words
entrusting still-unnamed wishes to the sound of the tide

Long ago, a crocodile crossed the path
and swallowed someone's little boat
that river, too, now carries light

moagi—those who pass through
a burned town, a language never heard before
before long, rain loosens the earth

Whenever the palms sway in the night
someone's song becomes the wind
memory dwells among forgotten things

I do not yet know
that a light will be kindled deep within the body
the flickering of this star knows it

Held in a gentle embrace, I listen
to the voices of waves, born and vanishing
not knowing whether they are pain or joy

To be born anew
as though rebuilding a church reduced to ruins
within those hands, prayer remains alive

Those who pass through
those who destroy, and those who nurture anew

continue their journey beneath the same stars of the night

I am not innocent
nor am I without sin
one bound to the empire's plural complicities

On a starry night, hidden among the signs of a distant train,
if I listen to Campanella's sleeping breath
the Milky Way resounds with a symphony

True happiness, true happiness
is the rose-colored dress unstained by blood?
Groundwater embraces a child drowning in water

Golden stars pouring down
and beyond them, blue, endlessly dark, dark
within a storm of silence, a cross

By the Spring, Calling a Name

Unya, let me say it again, my love.
Okay, isulti nako kana pag-usab, mi amor.

At the meeting place of the forest's green and the sea's blue, when a nameless blessing
comes to visit us.
Sa taliwala sa kabakahan sa lasang ug sa kabughaw sa dagat, moabut ang panalangin
nga wala pa'y ngalan kanato—karong higayona.

Descending a narrow moss-covered stone stairway into the valley, I feel a cool presence
rising from beneath my feet. The leaves of the trees sway as they sift the light. The sound
of water slipping through the spaces between them breathes in the distance. Before I know
it, I am standing before Camugao Falls. Water drops straight down from a high cliff face.
It breaks, foams, and flows on again. When I gently place my hand upon the wet rock, a
faint trembling reaches me through the coldness. The sound of the waterfall and the
silence filling the valley embrace one another. A single gust of wind passes through, and
spray touches my face. A quiet baptism for someone yet to be born. Water that simply
flows, simply resounds, simply exists here. In its stillness, my feet tremble with
excitement, trembling and trembling.

I slowly climb toward the Parish Church of Nuestra Señora del Carmen, standing upon
the hills of Balilihan. Its whitewashed walls seem almost ready to dissolve into the
sunlight. "This parish was established to receive those who returned from the mountains
after the Dagohoy Rebellion. In that sense, it is connected to Bilar," Sida says. Looking
up, I notice that the old bell tower has been completely embraced by the trees. Once, it
overlooked the Abatan River and announced the hour of Mass to those living among the
mountains. Now no one can climb it, and its bells are no longer heard. "Please tell us the
time of the next Mass," I whisper softly into the wind in the local language. A single

sound reverberates within my body. Rising from the earth and descending from heaven, it is a lively prayer that has not yet found its name.

I gently touch the floral carvings upon the church door and push. The air inside stirs softly, and geometric tiles spread beneath my feet. Dipping my fingers into the holy water at the entrance, I make the sign of the cross upon my chest. Coolness quietly seeps through me, while stained glass filters light across the walls. Looking upward, I find scenes of heaven painted on the ceiling gazing back in silence. Light streaming between the columns wraps itself around me like breathing. So bright. So blue. So deep. And then—tears almost begin to fall. Something inside me is surging like a wave. Unexpectedly, I lose my words and simply stand there. I was born on a Monday. My guardian angel is Gabriel. *Annunciation*—the image of the Virgin kneeling with her arms crossed over her chest beside the angel rises before me. Turning back toward the doorway, I see snow falling beyond the archway, upon the midsummer sky, upon the forest, upon the sea.

As I begin to ascend toward the snowflakes, they become flower petals and drift gently around me. Soft sunflowers emerge from the soil beneath my feet. I bend down to greet them. Not in English, nor Japanese, nor Cebuano, nor Spanish, nor even in the language of sunflowers, and yet I feel I can convey something important. Perhaps it is not language at all. I try to offer something like the fresh and living world that overflows when a young coconut is opened. At that moment, I feel a cool drop of water upon my forehead and slowly open my eyes. “You were asleep for quite a long time.” Holding a bottle of water, Ting speaks in a cheerful voice. I sit up from the sofa in the lobby of a long-established hotel in Tagbilaran. I beg (*mangayo*) for a Kisses chocolate in its golden wrapper—right now.

The following year, on a day in May when the green of the world seemed to burn, our daughter Athena was born.